

第 5 章 まとめ

第 1 節 東讃地域の土師器の変遷

1. はじめに

香川県最東部に位置する引田、白鳥、大内町（東部 3 町）においては四国横断自動車道建設などに伴い中世遺跡の調査が行われ、資料の蓄積が進んでいる。ここでは、遺構の時期決定を行い、遺跡の集落変遷および瓦窯操業期の集落状況を把握するため東部 3 町の中世土師器についてその変遷を論じる。

ここで取りあげるのは供膳具である杯、小皿に限定する。方法としては杯をⅠ～ⅩⅢ類、小皿をⅠ～Ⅷ類に型式分類⁽¹⁸⁾したのに基づき、各町の資料を紹介し、共伴土器や型式のセット関係から各型式の時期幅を推定する。本遺跡の遺構の時期はこれに基づき、事実報告において述べた。なお型式間で系譜関係を推定したものは同じ類型に区分し、ギリシャ数字の後に a、b をつけた。

2. 杯、小皿の型式分類

〔杯〕

杯Ⅰ～ⅩⅠ類は底部をヘラ切り、ⅩⅡ、ⅩⅢ類は糸切りする。

杯Ⅰ～Ⅴ類は体部が直線的に外方に延び、強く外傾する。

杯Ⅰ類 やや深手の杯。口径13.0～14.0cm、器高3.5～4.0cm。

杯Ⅱ類 浅い皿状の杯。口径12.5～14.0cm、器高3cm前後。

杯Ⅲ類 外傾度が強い杯。口径11.5～12.5cm、器高3.5～4.0cm。

杯Ⅳ類 Ⅲ類に類似するが、これより傾きが弱く浅手の杯。口径10.5～12.0cm、器高3.0～3.5cm。器壁が薄い。

杯Ⅴ類 小型の杯。口径約9.0～10.0cm、器高1.5～2.0cm。器高が低く、器壁が薄い。外傾度には強弱がある。

杯Ⅵ～Ⅷ類は直線的な体部が弱く外傾する。

杯Ⅵ類 浅い皿状の杯。

Ⅵa類 口径14.0～15.0cm、器高約3.0～3.5cm。

Ⅵb類 口径12.0～13.0cm、器高約3.0～3.5cm。

杯Ⅶ類 Ⅵ類に類似するが、これより深手の杯。口径11.5～13.0cm、器高3.5～4.0cm。器高が高い。

杯Ⅷ類 Ⅶ類に類似するが、これより小型の杯。

Ⅷa類 口径約11cm、器高約3cm。器壁と内面の体、底部境が厚い。

Ⅷb類 口径10.0～12.0cm、器高3.0～3.5cm。器壁と内面の体、底部境が薄い。

Ⅷ'類 口径約9cm、器高約2.5cm。小型である。

杯Ⅸ～ⅩⅠ類は直立気味の体部が弱く内湾する。

杯Ⅸ類 体部の直立度が強く、浅手の杯。口径11.0～12.0cm、器高3.0～4.0cm。

杯 X 類 深手の杯。口径12.5～13.0cm、器高4.0～4.5cm。

杯 X I 類 深手の杯。口径約11.0～12.0cm、器高3.5～4.0cm。器壁が厚い。

杯 X II、X III 類は直線的な体部が弱く外傾する。

杯 X II 類 X III 類より浅手の杯。

X II a 類 口径11.5～12.0cm、器高約3.5～4.0cm。

X II b 類 口径12.0～12.5cm、器高3.0～3.5cm。X II a 類より体部の外傾度が強い。

杯 X III 類 深手の杯。

X III a 類 口径11.0～12.0cm、器高4.0～4.5cm。

X III b 類 口径11.0～12.0cm、器高4.0～4.5cm。X III a 類より体部の外傾度が強い。

〔小皿〕

小皿 I～III 類が底部をヘラ切り、IV～VII 類が糸切りする。VIII 類は不明である。

小皿 I、II 類は口縁部が強く外傾する。

小皿 I 類 口縁部が短い小皿。口径9.0～10.0cm。

小皿 II 類 口縁部が長めの小皿。口径約7.0～8.0cm。

小皿 III 類 口縁部が短く、直立気味の小皿。口径約6.0～7.0cm。器壁は薄い。

小皿 IV 類 口縁部が強く外傾し、長めの小皿。形態、法量的には II 類に類似する。口径7.0～8.0cm。

小皿 V 類 口縁部が短く、直立気味の小皿。形態、法量的には III 類に類似する。口径約8.0cm。

小皿 VI 類 口縁部が短く、ほぼ直立する小皿。口径約8.0cm。器壁は厚い。

小皿 VII 類 口縁部が極めて短く、ほぼ直立する小皿。口径約7.0cm。器壁は厚い。

小皿 VIII 類 口縁部が強く外傾し、長い小皿。形態的には杯 V 類に類似する。口径約7.5cm。器壁は薄い。

3. 資料紹介

以下では各町の資料について時期を追って遺構ごとに順に紹介する。なお、天王谷遺跡についても概要を記しており、調査区名から記載している。

〈引田町〉

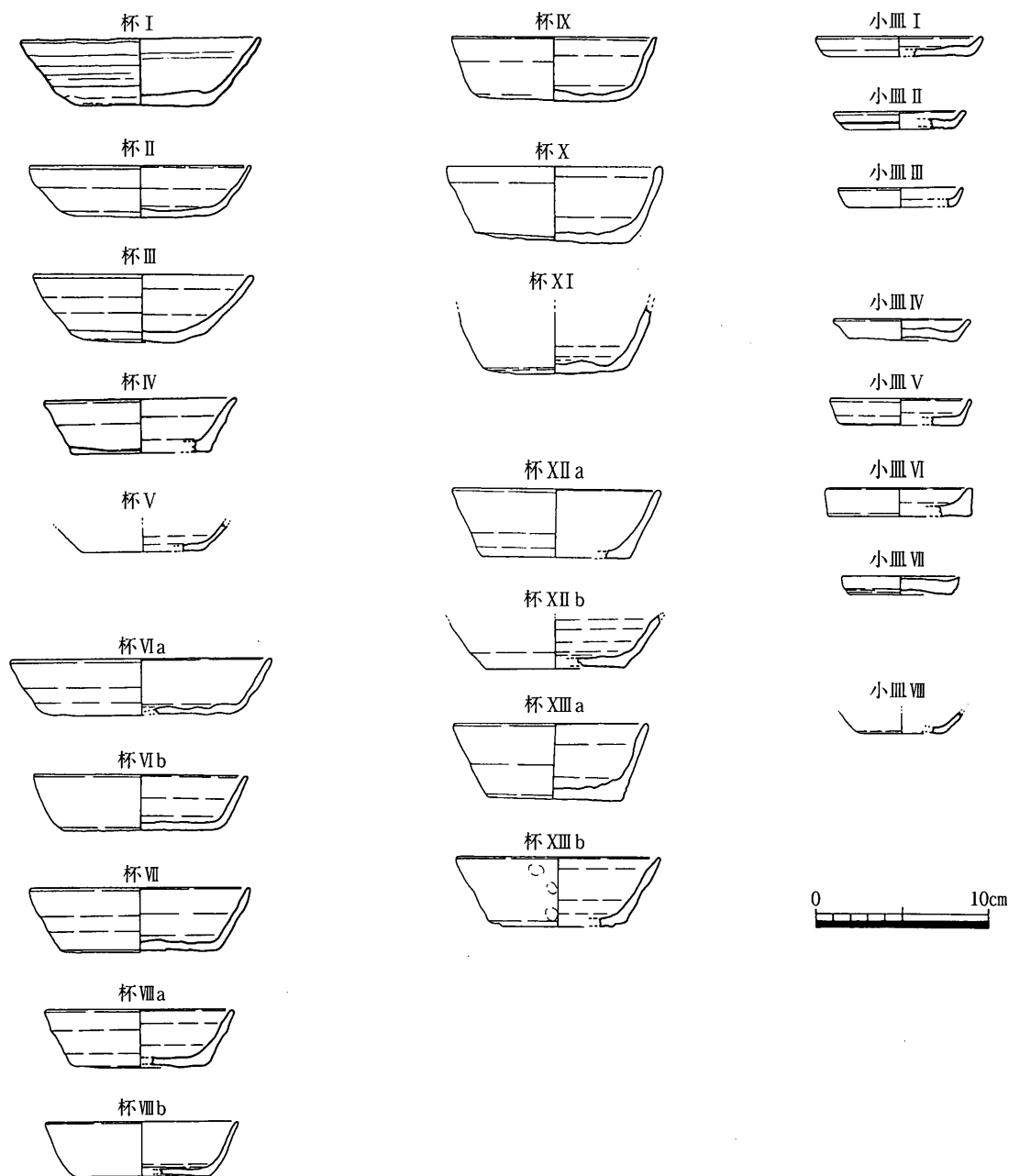
鹿庭遺跡 B 区 SX01⁽²⁰⁾ 礫が多く出土した性格不明遺構内で杯 IX 類が13世紀後半～14世紀前半に位置づけられる土師質土器土釜と共に床面付近から出土している。

I 区 SD06 溝から杯 VI b、VII、VIII a、IX 類、小皿 II 類が出土している。これらの出土状況は出土レベル、位置にばらつきがあり一括廃棄でないが、小規模であるためこれに準じるものと判断する。

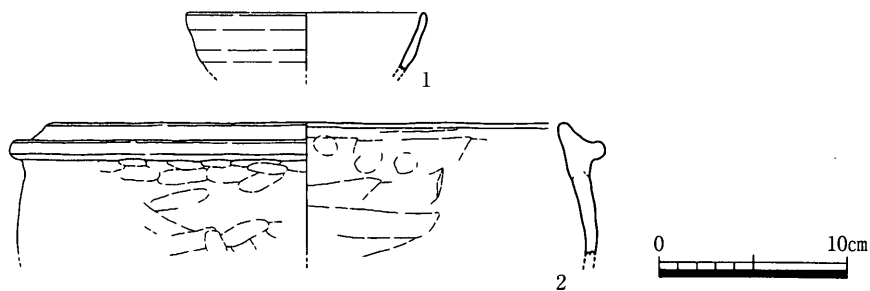
II 区 SK01 土坑から杯 VI b、VIII a、X I 類が出土している。これらの出土状況は墓への副葬品でなければ一括性があると判断できないものであるが、小規模であるためこれに準じるものと考える。

I 区 SB15-SP375 柱穴から14世紀前半の東播磨コネ鉢と共に杯 X II a 類、小皿 I 類が出土している。

I 区 SP154 柱穴から杯 V 類、小皿 III 類が出土している。



第173図 土師器杯・小皿分類図 (1/4)



第174図 鹿庭遺跡B区 SX01 出土遺物 (引田町) (1/4)

I 区 SK10 土坑の 2 層で杯 IX 類が 14 世紀後半の平瓦片に隣接して出土している。

I 区 SB06-SP260 柱穴から杯 IX 類、小皿 IV 類が出土している。

II 区 SK04 14 世紀後半の瓦を多量に廃棄した土坑から杯 VIII b 類、小皿 III 類が出土している（瓦は 2 次的な集積である可能性があり、そうであればある程度の時期幅をもつ）。

II 区 SK12 SK04 に隣接し、同様に 14 世紀後半の瓦を多量に廃棄した土坑から杯 V 類が出土している。ごく少量の小片 2 点（277、279）であり、混入かもしれない。

I 区 SK11 土坑から 15 世紀前半の土師質土器土釜と共に杯 X II b、X III b 類、小皿 IV 類、VII 類が出土している。

〈白鳥町〉

成重遺跡 D 3 区第 1 遺構面 SP33⁽²¹⁾ 柱穴内で土師器杯 10 点などが横方向に重ねられた状態で出土している。地鎮遺構と考えられ、一括性は高い。杯はいずれも I 類である。

善門池西遺跡 VII 区 SX01⁽²²⁾ 溝状を呈する遺構であり、陶磁器片、焼けた壁土と共に土師器が出土している。焼失した家屋の壁土と土器、陶磁器を一括廃棄したとされている。

出土した杯は VI b、VIII b、VIII'、IX 類、小皿は VIII 類がある。詳細は概報に譲るが、共伴する陶磁器は青磁碗・盤、白磁、中国産天目茶碗、古瀬戸緑釉小皿・平碗・おろし皿・筒形香炉・灰釉天目茶碗・鉄釉天目茶碗・直縁大皿・灰釉四耳壺・瓶子、丹波焼壺、備前焼壺・すり鉢などがある。黄瀬戸が藤沢編年⁽²³⁾で 14 世紀後半に位置づけられる。これは備前焼の年代観とも矛盾しない。

善門池西遺跡 VII 区 SP03 柱穴内で土師器杯、小皿 4 枚が口縁部を下向きに上下に重ねられた状態で出土している。建物を復元できないため地鎮遺構とされており、一括性は高い。出土した杯は VI b、VIII' 類、小皿は VIII 類である。

谷遺跡 II 区第 1 遺構面 SP01⁽²⁴⁾ 柱穴内で土師器杯 3 枚が口縁部を上向きに上下に重ねられた状態で出土している。洪武通宝を伴い、地鎮遺構と考えられるため一括性は高い。出土した杯は X 類である。

〈大内町〉

坪井遺跡 SX07⁽²⁵⁾ 遺構の底面からやや浮いたレベルで土師器杯 5 点が口縁部を上に向けた状態で出土した。これらは下位に 3 点が並び、その上に 2 点が重ねられている。人為的な配置が想定されており、一括性は高い。出土した杯は II、VI b 類である。

三殿出口遺跡 I-④区 SK04⁽²⁶⁾ 土坑上面で土師器杯 6 枚が重ねられた状態で出土している。地鎮遺構の可能性が指摘されており、一括性は高い。出土した杯はいずれも VII 類である。

坪井遺跡 SD99 溝の底面からやや浮いたレベルで土師器杯 2 点が口縁部を上位に向けて並んだ状態で出土した。人為的な設置が想定されており、一括性は高い。出土した杯は III 類である。

金毘羅山遺跡 II 区 SB02-SP075⁽²⁷⁾ 柱穴から杯 VI b、VIII b、IX 類、小皿 III 類が出土している。瓦器皿が共伴する。

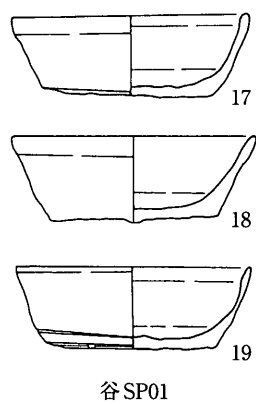
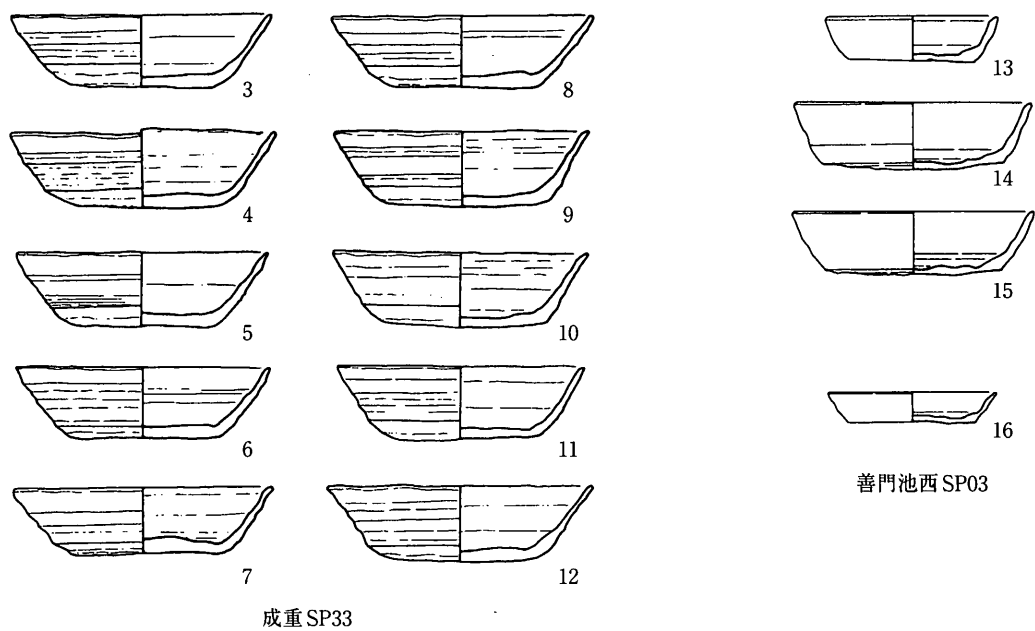
金毘羅山遺跡 II 区 SK05 土坑から杯 III、VIII b 類、小皿 III 類が出土している。

金毘羅山遺跡 II 区 SK06 土坑から 14 世紀前半の備前焼甕と共に杯 IV 類、小皿 III 類が出土している。

金毘羅山遺跡 II 区 SB02-SP070 柱穴から小皿 II、III 類が出土している。

金毘羅山遺跡 II 区 SB05-SP062 柱穴から小皿 II、III 類が出土している。

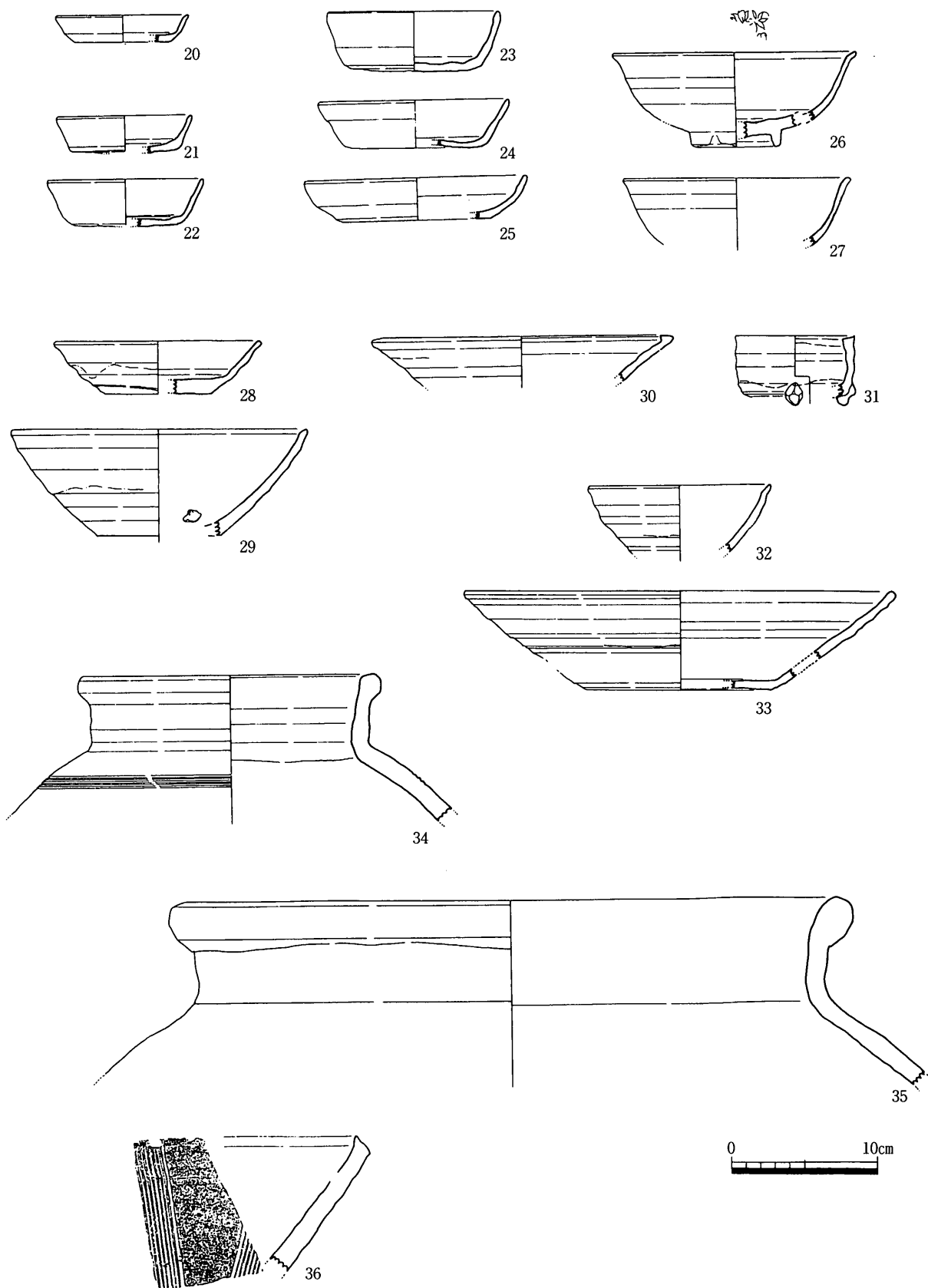
金毘羅山遺跡 II 区 SX11 不整形な遺構であり、多量の完形に近い土師器の杯、小皿が炭、焼土と共に床面から浮いた状態で出土している。一括廃棄したと考えられる。出土した杯は IV、VI b、VIII b、IX 類、



3～12 成重遺跡D3区第1遺構面SP33
13～16 善門池西遺跡Ⅷ区SP03
17～19 谷遺跡Ⅱ区SP01



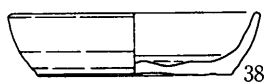
第175図 成重・善門池西・谷遺跡 出土遺物（白鳥町〔1〕）（1／4）



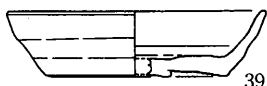
第176図 善門池西遺跡Ⅷ区 SX01 出土遺物（白鳥町〔2〕）（1／4）



37

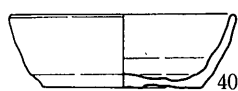


38

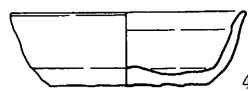


39

坪井 SX07



40



43



41



44



42



45

三殿出口 SK04

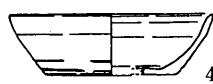


46

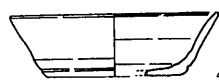


47

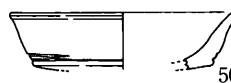
坪井 SD99



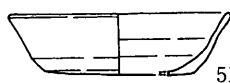
48



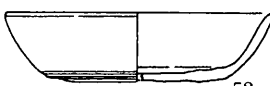
49



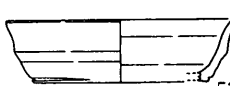
50



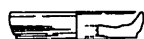
51



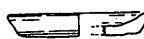
52



53

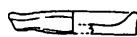


56

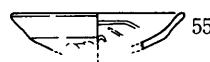


57

金毘羅山 SP070

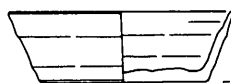


54



55

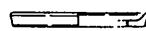
金毘羅山 SP075



58



59



60

金毘羅山 SK05



- 37~39 坪井遺跡 III区SK07
 40~45 三殿出口遺跡 I-④西区SK04
 46~47 坪井遺跡 II区SD99
 48~55 金毘羅山遺跡 II区SB02-SP075
 56~57 金毘羅山遺跡 II区SB02-SP070
 58~60 金毘羅山遺跡 II区SK05

第177図 坪井・三殿出口・金毘羅山遺跡 出土遺物 (大内町〔1〕) (1/4)

小皿はⅡ、Ⅲ類がある。14世紀後半の土師質土器土釜を伴う。

4. 類型の時期比定

共伴土器から判断できる時期ごとに存在する型式を列挙すると以下のようになる。

13世紀後半～14世紀前半：杯Ⅸ類

14世紀前半 ：杯Ⅳ、Ⅴ、Ⅵb、Ⅷb、Ⅸ、XⅡa類、小皿Ⅰ、Ⅲ類
 Ⅵb、Ⅶ、Ⅷa、Ⅷb、Ⅸ、

14世紀後半 ：杯Ⅳ、Ⅴ、Ⅵb、Ⅷb、Ⅷ'、Ⅸ、小皿Ⅱ、Ⅲ、Ⅷ類

15世紀前半 ：杯XⅡb、XⅢb類、小皿Ⅶ類

これらは混入した可能性があるものを一部含むが、各型式の時期幅をある程度反映している。これも踏まえて主要な型式の時期幅を押さえていく。

法量的に大きいものが古く位置づけられる傾向があるため、まず口径が12.5cm以上あるものについて述べる。該当するのは杯Ⅰ、Ⅱ、Ⅵa類である。杯Ⅰ類は高松平野以西を扱った佐藤編年の杯DⅡ-3類（12世紀後半～13世紀前半）に類似する。杯Ⅱ類は天王谷遺跡ではⅠ区SP499、Ⅱ区SR01などで出土している。引田町に隣接する徳島県上坂町の神宮寺遺跡⁽²⁸⁾に類例がある。A調査区のSO1001の物原で出土した杯は底部を糸切りし、法量は14cm台とやや大振りであるが、形態は類似する。12世紀後半の瓦器碗が共伴する。杯Ⅵa類は天王谷遺跡ではⅠ区SP284、Ⅱ区SR01などで出土している。板野町の古城遺跡⁽²⁹⁾に類例がある。C地点のSK1057で出土した杯は底部を糸切りするが、法量、器形とも類似する。12世紀後半の瓦器碗が共伴している。これらは他地域資料との類似性から12世紀後半～13世紀前半と考えられる。

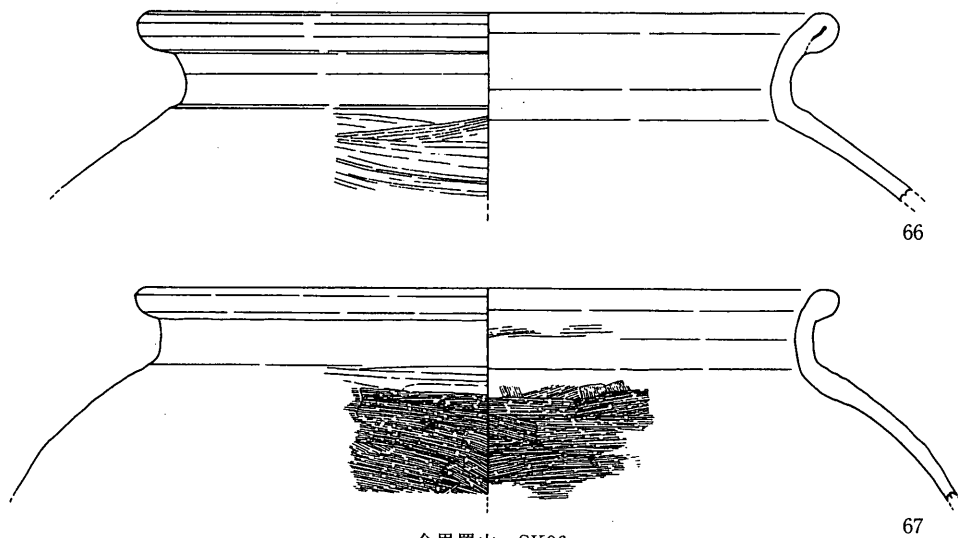
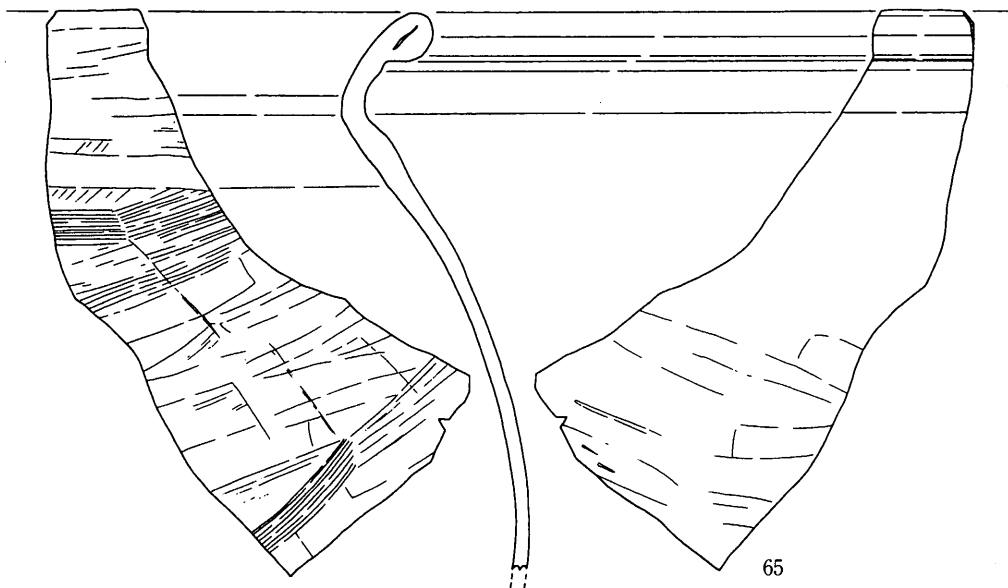
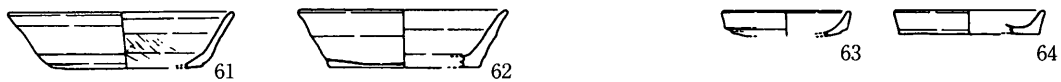
次に口径13cm以下と小振りのものについて述べる。Ⅵa類と形態的に類似するが、小型化するのがⅥb類である。坪井遺跡SX07でⅡ類と共伴するのが初現で、14世紀後半の善門池西遺跡SX01、金毘羅山遺跡SX11でも見られる。ただ、後者では組成に占める割合はごく少数となっており、時期幅は13世紀前半～14世紀前半ごろと考えられる。

Ⅷa類、Ⅷb類は法量、体部の傾きに差はないが、a類では器壁の厚さ、また体、底部境の内面が丸味を帯び、お厚いことに違いがある。14世紀後半の善門池西遺跡SX01、金毘羅山遺跡SX11などでb類しかないこと、後者では薄作りのものが一定量見られ、薄作りになることが型式変化の方向と考えられるため時期差と考えたい。時期幅はⅧa類が13世紀後半～14世紀前半、Ⅷb類が14世紀代と考えられる。

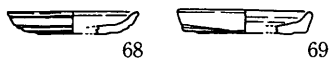
Ⅶ類はⅥb類よりやや深い、これに類似すること、天王谷遺跡Ⅰ区SD06でⅧa類と共伴することから13世紀後半から14世紀前半と考えられる。

Ⅸ類は13世紀後半～14世紀前半の鹿庭遺跡SX01で出土しているのが東部3町での初現である。だが、佐藤編年杯DⅢ-2類としてこの型式が設定されており、出土した高松市前田東・中村遺跡⁽³⁰⁾のSX04は13世紀後半とされている。よってこの時期に出現したと考えられる。また14世紀後半の善門池西遺跡SX01、金毘羅山遺跡SX11でも見られる。ただ、Ⅵb類と同様に後者ではごく少数となっており、時期幅は13世紀後半～14世紀前半ごろと考えられる。

V類は天王谷遺跡Ⅰ区SP154で出土しているものが佐藤編年杯D2-8類（14世紀前半）と類似する。また14世紀後半の天王谷遺跡Ⅱ区SK12でも出土している。後者は混入の可能性もあるが、一応時期幅を14世紀代としておく。



金毘羅山 SK06

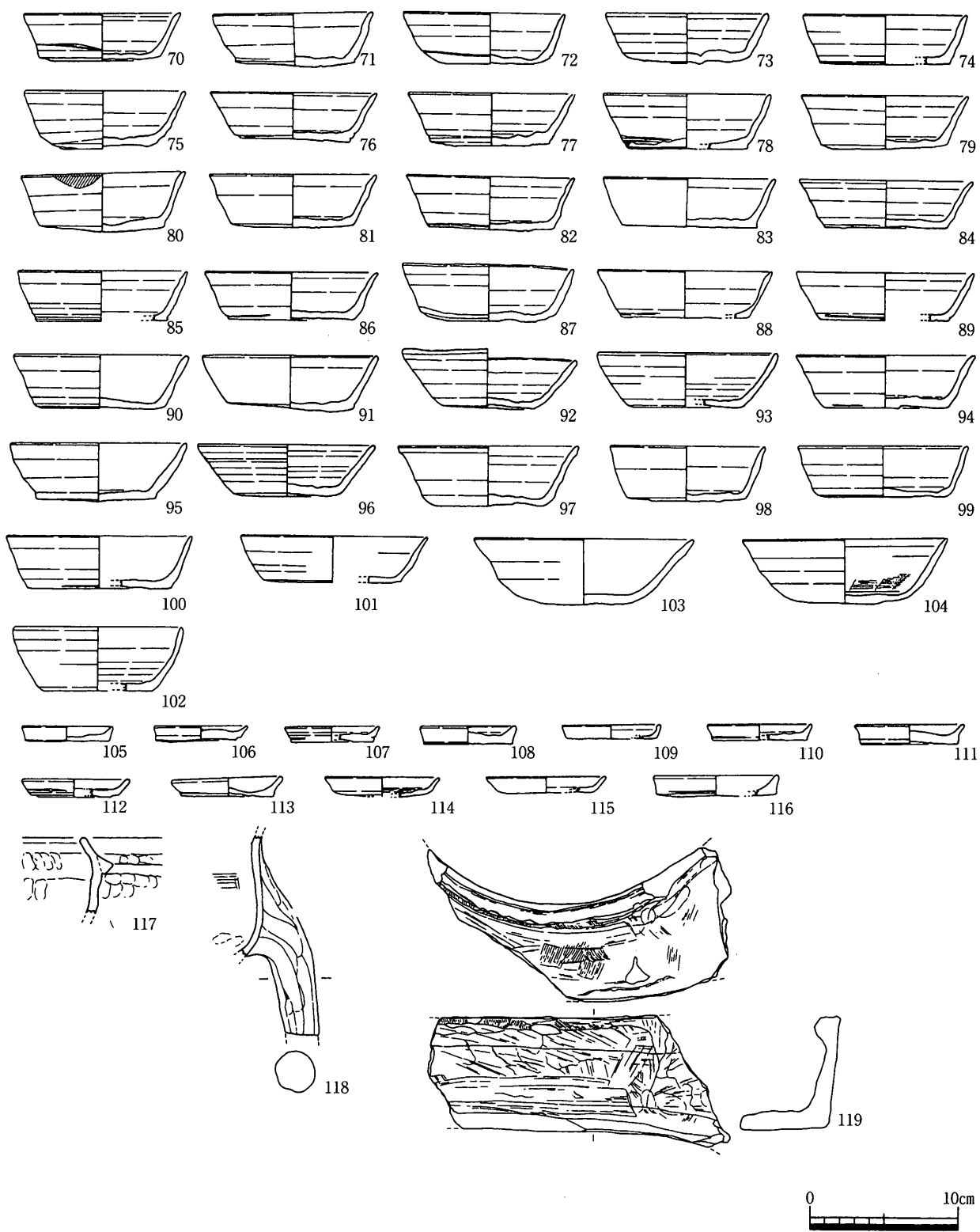


金毘羅山 SP062

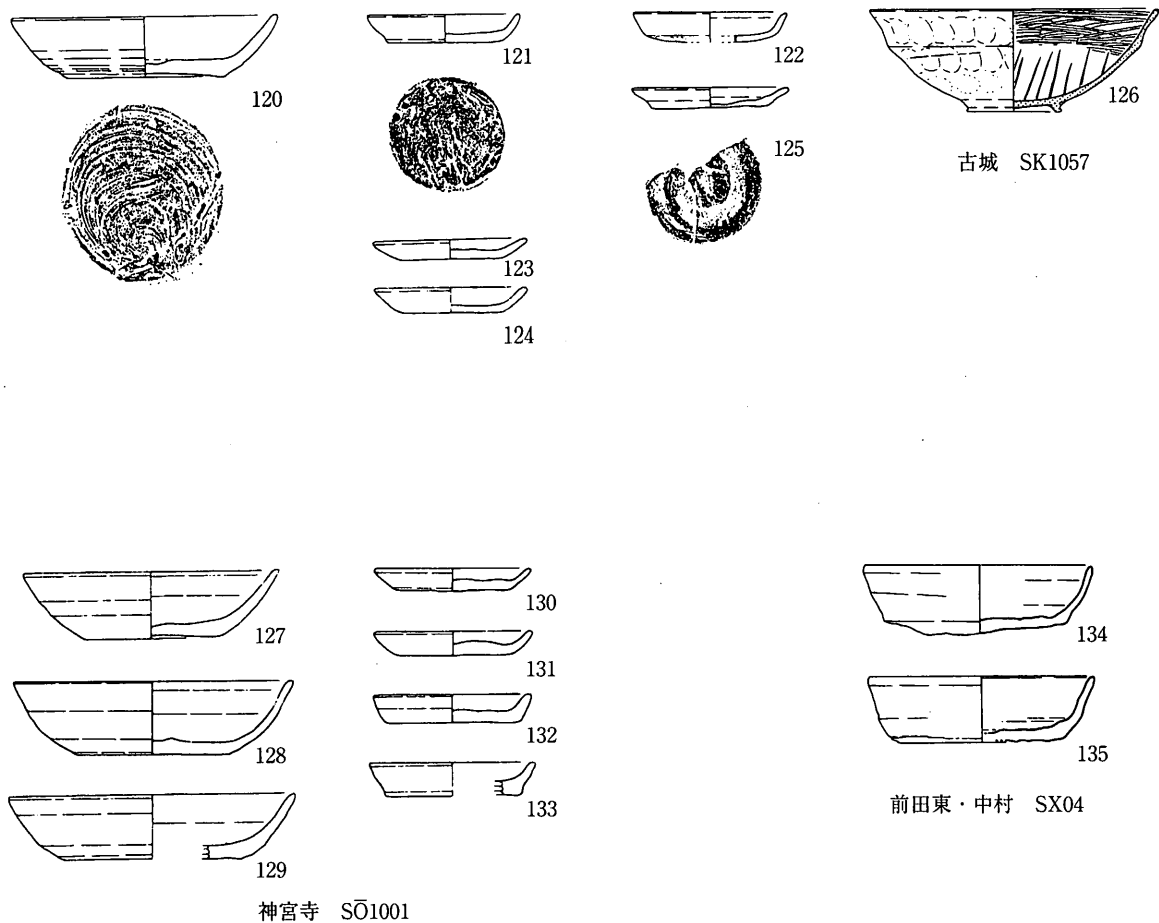
61~67 金毘羅山遺跡 II区SK06
68~69 金毘羅山遺跡 II区SB05-SP062



第178図 金毘羅山遺跡 出土遺物（大内町〔2〕）（1/4）



第179図 金毘羅山遺跡Ⅱ区SX11 出土遺物（大内町〔3〕）（1/4）



- 120～126 古城遺跡 SK1057 (徳島県板野町)
 127～133 神宮寺遺跡 SŌ1001 (徳島県上板町)
 134～135 前田東・中村遺跡 SX04 (香川県高松市)

第180図 古城・神宮寺・前田東・中村遺跡 出土遺物 (1/4)

XⅡa（Ⅰ区SP486などで出土）、XⅡb類とXⅢa、XⅢb類は法量に差はないが、共にb類では体部の傾きが強くなる。出土点数がごくわずかであるためXⅢa類が14世紀前半、XⅡa、b類が15世紀前半に存在するとのみ言え、時期幅については不明である。

小皿Ⅰ類は出土遺構が限定されるため14世紀前半に存在するとしかねない。Ⅱ類は天王谷遺跡Ⅰ区SD06で見られるので13世紀後半～14世紀前半が初現である。14世紀後半の金毘羅山遺跡SX11でも出土している。下限は明確でないが、13世紀後半～14世紀後半と考えておく。Ⅲ類は14世紀後半の天王谷遺跡Ⅱ区SK04などで出土しているが、上、下限は不明である。Ⅳ、Ⅴ類はそれぞれⅡ、Ⅲ類と法量、形態が酷似する。よって同じ時期幅と考えておきたい。

Ⅶ類は口縁部の立ち上がりがほとんど消滅しており、法量からⅣないしⅤ類の後出的な形態であると推定できる。よって出土遺構（Ⅰ区SK11）の時期と同じ15世紀前半と考えられる。下限は不明である。

以上から土師器の変化の方向性をまとめると杯は12世紀後半～13世紀前半に14cm台と大形で浅い皿状を呈するものが主体となっていた状況が13世紀後半～14世紀代にかけて小型化、薄作り化すると同時に形態、法量にバリエーションが増加したことが推定できる。小皿は杯以上に不明な点が多いが、15世紀代には口縁部が矮小化するものが見られる。こうした方向性は佐藤氏が高松平野以西で指摘した傾向と類似する。

5. 最後に

資料集成を行い編年を試みたが、果たせなかった。また各型式の時期幅を押さえるという作業も出現、消滅期について充分検証できていないものが多い。よって後述する天王谷遺跡の集落変遷についても非常に大まかにしか捉えられていない。このように今後に残る課題は多いが、現在も東部3町の遺跡は報告書作製が進行している。天王谷遺跡だけでなく当地域の遺跡を評価するためこれらも踏まえ、改めて編年を論じたい。

（註18）高松平野以西の中世土器を佐藤氏が編年する際、行った方法に倣った⁽¹⁹⁾。資料数が少ないこともあるが、異なる町においても各類型で基本的な形態、法量に大きな差は見られない。このため地域差を捨象して型式設定している。

（註19）佐藤竜馬「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 空港跡地遺跡Ⅳ』（財香川県埋蔵文化財調査センター他 2000）

（註20）『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第四十四冊 辻田石垣遺跡 辻田谷川下池遺跡 鹿庭遺跡』（財香川県埋蔵文化財調査センター他 2002）

（註21）「成重遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度』（財香川県埋蔵文化財調査センター他 1999）

（註22）「善門池西遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成11年度』（財香川県埋蔵文化財調査センター他 2000）

（註23）藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅲ—古瀬戸前期様式の編年—」『財瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要第3号』 1995

（註24）「谷遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成11年度』（財香川県埋蔵文化財調査センター他 2000）

（註25）『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第四十冊 坪井遺跡』（財香川県埋蔵文化財調査センター他 2002）

（註26）「三股出口遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成11年度』（財香川県埋蔵文化財調査センター他 2000）

（註27）『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第三十六冊 金毘羅山遺跡 塔の山南遺跡 庵の谷遺跡』（財香川県埋蔵文化財調査センター他 2000）

（註28）『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書11 神宮寺遺跡』徳島県埋蔵文化財センター他 1994

（註29）『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書8 古城遺跡』徳島県埋蔵文化財センター他 1994

参考文献

久保脇美朗「吉野川中下流域における中世前半期の土師器供膳具について」『論集 徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会 2002

第2節 出土瓦の検討

1. 瓦の器種と類型

出土した中世瓦は28リットル入りコンテナにして約50箱あり、2基の窯があるⅡ区北部に集中(第25表)している。完形に近いものも一部含むが、多くはかなり破損している。瓦類は軒平瓦、軒丸瓦、平瓦、丸瓦、布目(平)瓦、雁振瓦、鬼瓦などの器種に分けられる。いずれも小型瓦であり、最も大きい雁振瓦が全長30cm強を測るが軒瓦、平、丸瓦は長さ25cm前後である。燻化瓦なので基本的に外面は黒灰色を呈し、断面は灰白色～黄橙色である。だが、酸化気味で断面がやや赤褐色を呈するものも多く見られる。胎土は粘土の粗密、砂粒の含有量により4種類に区分できる。以下、器種別に述べる。

《軒平瓦》

出土した軒平瓦は40点ある。瓦当は上下幅1.8cm程度、左右幅約16cmとほぼ同じで、文様はいずれも連珠文である。珠文の大きさ、珠文相互の、また圈線との間隔、配置が基本的に変わらず同文である。珠文の大きさは径約5mmだが、中央右側の珠文帯では径約7mmと大振りのものがⅣ類で2点(204、208)ある。また圈線の左下交差部が磨耗していないものではいずれも上下方向の圈線は交差部で止まるが、左右方向の圈線が外区へ突き出している。範傷については瓦当面が磨耗しているものが多いため同範関係を想定することはできなかった。胎土は全てタイプ①の緻密でネットリしており、砂粒を少量含む、である。

なお、中央右側の珠文帯でやや大振りの珠文をもつものが見られることは2つの可能性を示す。1つは小振りの珠文を持つ瓦に同範瓦を含むが、焼成条件の差異などにより偶然この部分だけ大きく残ったという可能性。もう1つは異範という可能性である。同範関係を想定できなかったこともあり、どちらが妥当であるかは不明である。分類は法量的には全長、顎の長さ、製作技術では顎後縁の面取り有無により4種類に区分できる。

〈軒平瓦Ⅰ類〉全長は20.5cmを測り、顎の下端幅は1.5cmである。瓦当成型法は不明であり、顎後縁に面取りを施さない。凸面にタテケズリを行った後、顎部瓦当裏面には幅約3cmに渡ってヨコナデを施す。顎と平瓦部がなす角度は直角に近い。凹面の布目痕はほとんどナデ消す。

〈軒平瓦Ⅱ類〉全長は約24cmを測り、顎の下端幅は2cmである。瓦当成型法は瓦当張り付けであり、顎後縁に面取りを施さない。凸面にタテケズリを行った後、顎部瓦当裏面にヨコナデを施す。顎と平瓦部がなす角度は直角に近い。凹面の布目痕はほとんどナデ消す。

〈軒平瓦Ⅲ類〉全長は完存するものがないため不明である。顎の下端幅は2cmを測る。瓦当成型法は瓦当張り付けであり、顎後縁に面取りを施す。凸面にタテケズリを行った後、顎部瓦当裏面にヨコナデを施す。顎と平瓦部がなす角度は直角に近い。凹面の布目痕はほとんどナデ消す。

〈軒平瓦Ⅳ類〉全長は25.5～27.0cmを測り、顎の長さは1.5cmである。瓦当成型法は瓦当張り付けであり、